

# 外国語科教育の基礎概念

横 田 勉

## はじめに

外国語の学習は社会的学習の一形態であり、特定の国や民族を越えて、文化共同社会の次元に同化できる能力を身につけることを最終的な目標とする。この意味で日本人のための外国語教育は、言語文化教育を目指すべきであり、学習者の文化化を目標とする広い意味での言語教育であるといえよう。このような基本的な性格をもつ外国語教育を、教科教育学に限定して考えると、人間、言語（外国語）、文化の三つを主要な構成要素としてとりあげることが必要となる。この三つの構成要素を核として、外国語教育を〔外国語科教育<言語教育<教育〕という系列の中で、教科教育学の一体系として位置づけるための基礎概念について考察するのが本稿の目的である。

外国語科教育の三構成要素のうち、言語（外国語）については特定の外国語に限定しないで、特に主要な課題である言語行動について考察する。また本稿では教育学的観点と同時に、特に社会学の観点から広い視野において、外国語科教育をとらえることを試みる。

## I 人間観

外国語科教育を基本的要素として、人間、言語および文化の三つをあげることができる。外国語科教育における学習者とは、外国語科教育を構成するこの三つの構成要素のうちで、もっとも主要な位置づけを与えられる人間としての学習者である。外国語科教育に限らず、一般にこの人間である学習者をさまざまな状況において理解することから、すべての教育活動は出発する。一般に教育学における人間とは、哲学的人間学や人間生態学などの分野における人間理解の方法論にみられる分析手続きと重なる場合が多い。人間学とも呼ばれるカントの経験学は前者の類に入り、以後ボルノー、ロート、ランゲフェルト、などによってこの種の研究が展開された。一方後者の類に属する研究としては、主としてアメリカにおいて展開された教育と社会環境との相関に関する研究があげられる。

どのような人間観を採ろうとも、一つだけ明確な点は、人間が内的にせよ外的にせよたえず変容してゆく生活体であるという事実である。すなわち人間を教育の対象としてとらえるという場合は、人間を社会的欲求や文化的欲求をもって教育的環境に生きる生活体としてとらえ、その生活体を教育的環境において育てることなのである。このことはまた一方で、人間が心理的な欲求を充足するためにとるさまざまな行動を教育という視点から制御し、理解することを意味する。この人間の行動は社会環境にもっともうまく適応する目的志向活動であると同時に、人間のパーソナリティ形成につながる活動でもある。このように人間を環境へ適応するためにたえず活動を

続けて変容し次第に充実したパーソナリティ体系をそなえてゆく生活体としてとらえる立場をまずここで確認したい。外国語科教育における学習者もこの点で教育の対象として研究されるべき多くの可能性を秘めているのである。そしてこの変容する人間を人間の生活する環境との係わりにおいて、さまざまな視点から把握することが広い意味での教育であり、もっとも好ましい人間理解の方法である。教育においては教育学的視座からこの人間を理解しようとする。ゆえに外国語科教育においてもこのような教育における人間理解という基本的な観点に基づいて、学習者を被教育対象としてとらえるのである。

外国語科教育における学習者は社会的文化的価値を学びとり、それを自己のパーソナリティ体系形式に役立てようとする欲求をもった生活体であると定位した。それは自己以外の社会集団に参加したり（社会的欲求）美的あるいは道徳的価値を追求したり（文化的欲求）する活動体であるということでもある。しかも自己の所属する集団の社会的文化的様式を他の集団のそれと比較検討することが外国語学習者には必然的な課題となる。そしてこの比較検討は個人のレベルと同時に集団のレベルにおいて行われる。ここではこのような比較検討を外国語科教育で実現する方法について考察してみたい。

一般に人間は社会集団にあって、社会生活を営んでゆく際に、相互依存や協力関係という社会関係を通して社会化を維持してゆく。この社会的関係成立の過程は、結合関係や分離関係（内容的）血縁関係、地縁関係、文化関係、利害関係（成立的）、さらに直接および間接接触関係（接触的）<sup>1)</sup>などの社会的行為の観点から把握することが必要である。これは人間行動の機能に視点をおいた社会集団のとらえ方である。このようにいくつかの視点から人間の行動を分析的に把握することは、あくまでも同一の社会集団内における人間相互の社会的関係のモデルである。外国語科教育においては、異文化間、すなわち複数の社会集団相互と、それぞれに所属する人間相互の社会関係を考えることが必要となる。これらの社会関係を人間相互のレベルでの関係と同時に、社会集団相互のレベルにおける関係として説明することが課題となる。すなわち同一社会集団内における対人的相互作用における親密化の過程を理解すると同時に異質集団相互の相互作用をも考えなければならない。

一般に社会集団においては、その機能集団と組織性について、各集団相互の間に差がある。外国語科教育における最大の課題は、この社会集団の組織性とその機能集団の理解にあり、さらにその根底にある対人的相互作用を言語文化の領域において把握することにある。社会集団は多くの機能集団から成り立つがこれらの機能集団はその社会集団の成員によって成り立つものである。しかしながら社会集団によって機能集団の特定はそれぞれ異なっており、複数の社会集団に共通に認められる機能であっても、実質的な機能そのものが違っている場合もある<sup>2)</sup>。言語構造が人間の思考体系や文化を反映すると言われるが、そしてこのことは十分妥当な考え方であると思われるが、その根底にはこうした機能集団のどれか1つ以上に所属する個人の様式化された社会的文化的価値が表出様式を制約しているためであると考えられる。

以上の観点を基底として、異文化間、異質社会集団間に生活する人間相互のコミュニケーション

ン活動を適切に実現することと目的とする外国語科教育においては、特定の個人と特定の集団の相対的な地位と役割を明確にすることがまず必要である。母国語集団における個人の位置関係と役割は、外国語集団においても同じ位置関係と役割を割り当てられるとは限らない。その理由は個人および集団相互の結合関係（社会的および心理的）が社会集団により異なるからである。この役割を学習過程という観点から見るとおよそ三つに分類される。第1は特定の役割に伴う規範と価値の学習であり、その役割に必要な行動規範と価値観を身につけることである。第2は役割に伴う技能や技術の学習である。そして、第3には自己の新しい役割を認知することの学習である。（役割知覚）外国語を理解できるのにその外国語が日常使用される社会に入ると、日常生活のコミュニケーションがうまく実現できないという場合は、その原因がこうした機能集団における個人の位置関係と役割が理解されていないからである。勿論この他にも語学の学習が表現形式の習得にのみ向けられることによる表面的な知識の学習に終わってしまうこと、学習過程における規範や価値観の伴わない教育的内容の欠如した教材等の使用、言語の機能と人間の社会的行動の係わりを無視した断片的な場面構成による言語学習なども、このような原因として数えあげることができよう。しかしこうした原因はあくまでも教授学習過程の領域における技術上の問題であって、人間観、学習者観についての基本的な理解の欠如こそ、もっと根本的な問題であることを反省しなければならない。

外国語科教育における学習者の位置づけは、以上検討してきたような背景をもって、社会的、文化的、個人的なレベルにおける相対的關係という社会心理学的な観点に立って、総合的に把握された一つのパーソナリティ体系として行われるものである。したがって目標外国語を使用する人々は、学習者にとってはいわば複写された自己であるといえよう。そして学習者は時間的な次元や空間的な次元でいかなる位置と意味を与えられ、かつまた持ちうるかを課題として把握されるのである。外国語科教育はこうした人間個人の有意性を問いつつ、人間そのものの視座と次元を基底として、総合的な人間理解を目指して展開される教育活動であるといえることができる。

## II 伝達行動

では前節に呼応した人間観にもとづく人間の一般的な言語行動における伝達行動のモデルについて検討してみたい。人間は必ず個有の社会集団、即ち基礎的社会集団、機能的社會集団、随意的社会集団などの目的別社会集団に重複して所属している。社会集団が異なっても、各集団における機能集団は類似しており個々の社会制度や行動様式において差が認められるに過ぎない。社会集団が異なっていれば、行動様式を表わす一つの手段としての表現様式が異なるのも当然である。外国語科教育では、そうした異質社会集団の成員相互の意思の伝達や文化（言語文化体系）を理解する手続きを学ぶことを目的とする。その手段として、目標外国語そのものの体系（言語体系）を学ぶのであって、言語体系そのものを学習するだけでは、同次元における思想や文化の伝達手続きやそれらを理解することは期待できない。

個人は特定の社会集団に所属し、その集団内の規範や慣習といった社会的制約のもとに互いに

影響し合って生きてゆく。この対人的相互作用はたとえば次のようないくつかのタイプに分けてとらえることができる。<sup>3)</sup>

(1) 応答的随伴型相互作用

互いに相手の一番最後の行動に対して反応するという連鎖で相互作用が継続してゆく場合である。

(2) 非対称的随伴型相互作用

一方の行動が他方の反応を呼びおこしてはいるが、あくまでも行動を起している側の一方的なイニシアチブで相互作用が展開されてゆく場合である。

(3) 相互的随伴型相互作用

一定の共通な目的が存在していて、この目的に向かって対人的相互作用が展開されてゆく場合である。

(4) 疑似随伴型相互作用

きわめて形式化された場面における社会的行動であって、互いの反応が時間的に前後してなされるために、表面的には相互作用であるかのようにみえる行動の場合である。

外国語教育においては、これらの種類のうち、まず(1)型に属する相互作用を出発点として、(3)型に属する相互作用を目標とした言語教育を考えることができる。すなわち異質文化をもつ社会集団に生きる個人のレベルにおける相互作用を基底に据えた外国語科教育を目指す時、これら二つの直接的な伝達行動のパターンが(2)型や(4)型の相互作用に優先するからである。このような対人的相互作用の観点に立つと、外国語科教育の目標は社会的能力の獲得にあるとすることができる。言語体系に関する知識を身につけることは、この観点からはこの社会的能力を獲得するための有効な一つの手段として位置づけることができよう。

一方このような対人的相互作用をコミュニケーションのシステムとして考えると、このシステムの安定を保つために係わってくる変数を次のように規定することができる。<sup>4)</sup>

(1) AB相互の魅力の強さ(ここでA, Bは個人, Xは対象とする。

(2)  $A \rightarrow X$ ,  $B \rightarrow X$ の不一致の程度

(3) 対象XのABにとっての重要さの程度

(4) 対象XのABにとっての共通の係り合いの程度

このような変数の導入は、人間の社会的行動をある程度記述的に把握するのに有効である点は認められる。しかし一方ではこの対人的相互作用の展開が、人間個人の内面における行動の自主的調整や相手の行動に対する意図的な影響を志向して表出される行動をも説明しつくすことは完全には期待できない。これを実現するためには個人を包む社会的文化的状況との要素間の結びつきを説明することが必要となる。外国語科教育で課題としてとりあげるのはこのような変数や要素間の結びつきの連鎖を、どちらか一方の所属する社会集団の連鎖をもとに調整することである。それにより異質な二つ以上の社会集団ごとにそれぞれに所属する成員相互のレベルにおける共通のコミュニケーションの場を確保することができるからである。

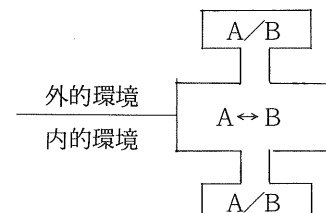
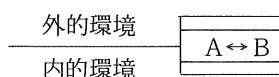
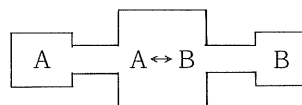
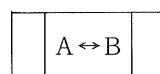
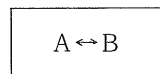


び(3)の逆の場合である。目標外国語を使用して、AとBが同じ次元で伝達行動を実現するためには、目標外国語そのものの使用能力の他に、AとBに共有される伝達環境が必要である。

### Ⅲ 伝達環境のモデル

異質な社会集団にそれぞれ所属するA、B二人の相互作用としての伝達行動を実現するためには、AとBに共有できる伝達場が必要である。この伝達場は現実場面的（外的環境）と抽象的および空間的（内的環境）から成り立っている。この二種類の共有される伝達環境は次のような型に分けられる。

- (1) A、B両者の伝達環境が完全に一致する場合（この場合は内的および外的環境の両方についてあてはまる。）
- (2) A、B両者の伝達環境が部分的に重なって、共有される伝達環境が実現される場合（この場合も内的および外的環境の両方についてあてはまる。）
- (3) A、B両者の伝達環境がまったく異なっており、そのために共有すべき環境をAとBが意図的につくり出す場合（この場合も内的および外的環境の両方について、あてはまる。）
- (4) 内的伝達環境と外的伝達環境とが部分的に重なり合って、共有される伝達環境が実現している場合
- (5) 内的および外的環境にAとBが別々に所属する為、共有すべき環境をAとBが内外二つの環境にまたがって意図的につくり出す場合。



外国語科教育では特に課題としてとりあげる伝達環境は(3)と(5)のような場合である。異質社会集団にそれぞれ所属する個人AとBとによって共有される伝達場がない限り、コミュニケーションの成立は望めない。このような場合には、真の意味での外国語使用の能力や外国語学習者の知的世界の拡大を望むことはできない。特に日本における外国語教育では、学習者が心的世界において共有できる伝達場をつくり出せるような能力を身につけることが最大の課題となる。このような伝達環境のモデルに応じた外国語教育の方法を、教科教育学の中に位置づけることが当面の課題であるといえよう。

このモデルにおいて、言語文化体系を理解するために共有されるべき環境が必要である。(1)や(2)のモデルにおいて、仮に言語生活体系を理解するために共有される環境を外的環境とするならば、この言語文化体系を理解するために必要な共有されるべき環境は内的環境ということができ

よう。言語文化体系は言語生活体系の理解を基底として成立するものであるから、言語文化体系を理解するための環境は内的環境である。したがって共有されるべき環境のパターンは外的環境の図式と同じであるが、間接的接触による抽象的な次元、ないしは非現実的な状況における伝達行動であるという点で、内的共有環境は「複写」された世界の拡大に対応する人間の最適な言語行動の場であると言えよう。

#### IV 文化観

文化とは「人間に内面化されたもの」であり、特定の社会集団の成員が共通にとろうとする傾向のある顕在的および潜在的な生活様式であり、歴史的につくられた一つの体系である（クラックホーン）と定位される。このような心理学的なとらえ方は、人間の成長と発達の図式との関連において、文化をとらえようとする立場であるが、これに対比して、一方では人間が学習という意図的な操作を経験して身につけてゆく行動様式が文化の一つ一つの構成要素であり、それらの要素の有機的な体系が文化である（ラドクリフ・ブラウンなど）とする社会学的な文化観もある。

教育と対比して文化を把握するときには、いずれの文化観を採るにしても、文化が人間の社会に展開される人間の行動様式や生活様式である（ポルトマン）ことは認めなければならない。しかしこれは広義の教育における文化観の出発点であって、究極的には「孤独な人間が、自由に自発的に創造したもの（ディルタイ）を文化のもう一つの側面として考えることができよう。この点では生活様式に対応するものとして表現様式をあげることができる。このような社会的組織から独立した別の次元に属する世界に学習者が入り込むことができるような手段と能力の学習をもって教育の下位体系の一つとしての外国語科教育を位置づけることができる。ここでは人間の行動様式や表現様式という観点から人間の社会的集団の特徴をとらえることをもって文化の体系とする立場を確認して、外国語科教育における文化のあつかいについて考察する。

外国語科教育の領域でとりあげられる文化は、「人間と人間との結合関係」（テンニース）に關与する意味的象徴的文化、いわば人間活動の精神的所産である。この種の文化は一般には宗教、芸術、科学などの非物質的文化と慣習、制度、法律などの制度的文化を主要な内容とするものである。社会学的観点からは、文化はさまざまな相をもった体系であるとして説明することが一般に行われている。たとえば文化の諸相を(1)社会的規範（慣習、道徳、法律、制度など）、(2)マスコミュニケーション、(3)世論、(4)イデオロギー、(5)芸術、(6)宗教、(7)科学などに分類する方法である。一方文化を言語との関連においてとらえると、言語も文化の一つの相ではあるが、他の諸相と異なる点は言語がそれら諸相の根底にあるとする見方である。本稿では言語を介して文化の諸相を理解することが、特に外国語科教育の主要な課題であるとする立採を採りたい。言語体系が言語生成と発達および消滅という一連の過程を経て、人間の社会に存在する実体であるのと同じく、文化も特定の行動様式をもって発生し、より多くの人間により共有され、時には消滅してゆく。この文化的行動様式の生成と発展はおよそ次のような過程を経る。<sup>5)</sup>

##### 1. 新規な行動様式の発生

2. 任意的文化
3. 特殊的文化
4. 普遍的文化

この1～4の過程は一つの循環系をなしている。この文化的様式のそれぞれに言語体系を対比すると、言語の社会的機能を軸とした言語使用の問題につながる。人間に内面化された行動様式というときは、その内面化の手続ききを言語を媒体として実現することを意味する。したがって特定の行動様式が新たに発生する場合、人間がどのような言語行動によって、その新たな行動様式を実現するかということ、その実現に必要な手続きこそが外国語学習の課題なのである。したがって、普遍的文化の理解に先立って、個々の任意的文化、その文化を構成している特定の行動様式とそれに対応した言語体系をまず先に学習することが、外国語学習の当面の課題となる。

一方このような文化観と言語観にもとづく外国語科教育が期待する学習者の能力は文化化の能力であり、それは本質的には、人間が時間や空間を超越して認識する文化の内容消化である。一般に個人の所属する社会集団に関する知識に基づいて、その文化集団に特有の事象や現象を「価値のパターン」(パーソンズ)として身につけることができたとき、その個人は社会的能力を身につけたといえることができる。一方このような社会的生活の場としての生活環境を人間の精神生活の場としての文化環境と対応させて設定することができる。そしてこの文化環境における学習者のパーソナリティ体系形式に関与する対象のカテゴリー化や概念化の能力を持って、文化化の能力といえることができる。したがって社会化が特定の社会集団の成員に欠くことのできない基本的な能力であるのに対して、文化化の能力は特定の社会集団の単位を超えて人間に普遍的に共有される知的創造を可能にする能力であるといえよう。<sup>6)</sup>

以上を対応する一連の系列として整理すると表-1のようになる。

表-1

領域	言語領域	文化領域	学習領域	目標能力
項目	言語体系→	表現様式→	言語化の手続き→	言語能力
	言語生活→	生活様式→	言語使用→	社会化能力
	言語文化→	行動様式→	言語文化→	文化化能力

外国語教育における文化のあつかいが、ともすれば顕在的な生活様式と同一視されやすい点は特に注意しなければならない。外国語教育に限らず文化を教育の対象とする場合には、文化の個々の特徴のみに関与するのではなくて、それら個々の特徴が捨象され、一般的、普遍的なカテゴリーの特定にまで学習者が到達できるようなレベルにまで関与することができなければならない。そこまで到達できなければさまざまな文化を一種の価値体系として共有できるような人間を期待

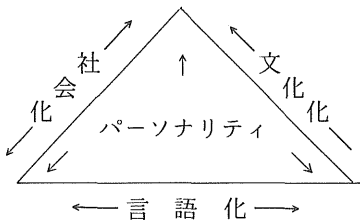


することができないからである。

外国語教育における文化観は、このように、さまざまな文化体系をもつ社会集団の言語を学ぶことであり、各集団に個有な言語文化の個別の特徴を理解すると同時に、各言語文化の共有的内面化の手続きをも学ぶことまでも含むものであるといえよう。

### おわりに

人間、言語、文化という三領域を基底とした外国語科教育の基礎的概念を、社会学的観点を導入して検討してきた。これら三領域の基礎概念を核に、外国語科教育は三種類の能力を伸ばすための教科であるといえる。

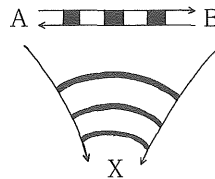
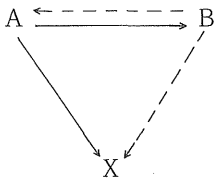


<注> 矢印は伸びを示し、三角形内の矢印はパーソナリティ体系の拡大を示す。

外国語学習は言語体系を基底として、言語化、社会化、文化化という三つの能力を身につけてゆく学習過程である。そして三辺のそれぞれの伸びに応じて、形と面積が変化する。教科教育学としての外国語科教育は、この三角形の形と面積によって、その有効性や妥当性、そのあり方等を問われるといえよう。

### < 注 >

- 1) 大場祥護 『文化社会学』 内田老鶴圃新社 1976 p. 64～65
- 2) 社会集団の機能としては、一般に次のような機能が認められる。
  - ①個人の地位
  - ②個人の役割
  - ③相互作用（これには個人と集団との二つのレベルがある。）
  - ④社会規範（慣習、制度、法律など）。
- 3) 菊池章夫・斉藤耕二編 『社会化の理論』 有斐閣 p. 66～67。この対人的相互作用の型は E. E. ジョーンズ, H. B. ジェラード (1967) による。
- 4) 対人的相互作用における親密化の過程は、A-B-Xシステムとして Newcomb, T.M. により紹介された。このシステムにおいて、個人Aの個人的システムは図-1のように、まな個人AとBの集合的システムは図-2のように示される。



矢印はその方向へのオリエンテーションを示す。実線は矢印を発する人のオリエンテーション、点線はAによってBに帰属されたオリエンテーション、太いバンドはバンドで結ばれたオリエンテーション間の関係を示す。(以上の説明は長谷川浩・岡堂哲雄編『人間関係の社会心理』金沢文庫・1974 p. 117 を参照した。

- 5) 福武直、日高六郎共著 『社会学』 光文社 1977 p. 171
- 6) 社会化能力、文化化能力ともに、人間にとっては欠かすことのできない能力である。しかし文化化能力を外国語科教育でとりあげるときは、学習者が外国語使用者とはまったく異なった社会集団に生活しているという点で、異質社会集団における文化化能力は、学習者の所属する社会集団における文化化能力と同一にあつかうことは妥当でない。